View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Gunma University Academic Information Repository

群馬大学教育学部紀要　人文・社会科学編　第 60 巻　105―119 頁　2011

歴史授業の現状と傾向

―― 大学生への新旧のアンケート調査結果の比較考察から ――

岩　永　健　司[1)]・服　部　一　秀[2)]
1）群馬大学教育学部社会科教育研究室
2）山梨大学教育人間科学部社会科教育講座
（2010 年 9 月 24 日受理）

Present State and Tendency of Learning History

―― Questionnaire Survey of University Students ――

Kenji IWANAGA
Department of Social Studies Education, Faculty of Education, Gunma University
Kazuhide HATTORI
Department of Social Studies Education, Faculty of Education & Human Sciences, University of Yamanashi
（Accepted on September 24th, 2010）

Ⅰ．はじめに―研究の目的と方法

これまで歴史授業についてさまざまな問題が指摘され，それに対し内容，方法等に関してさまざまな克服の方途が講じられてきた。では歴史授業の状況は改善されてきているのであろうか，その現状はいかなるものであろうか。

本稿の目的は，小・中・高で受けてきた歴史授業に対して現役の大学生がどのような受け取めをしてきているのかを中心に，学習者の立場から見た歴史授業に関するアンケート調査の結果をもとに，歴史授業の現状と傾向を明らかにすることにある。

歴史授業に対して指摘されてきた問題の中でも代表的なものは，教師によって一方的に伝達される歴史的知識の受容学習という方法面に対するものである[1)]。知識の詰め込みなどと呼ばれ，学習者である児童・生徒にとって主体的な学習が行われていないことが厳しく批判されてきた。

このような批判に対しては，次のような 3 つの疑義や反論も想定される。

第 1 は，少なくとも小学校の歴史授業では，児童主体の活動的な学習が中心になっているのではないか，受動的な知識の受容学習はあまり行われていないのではないかというものである。一般的に小学校では中学校や高校と比べれば学習形態や学習活動の工夫がなされることが多く，歴史授業の場合でもそうなのではないかという疑義や反論である。

第 2 は，中学校や高校の歴史授業でも，教師によって伝達される知識の受容学習という方法面は改められてきているのではないかというものである。学習指導要領の第 6 次改訂（1989 年）や第 7 次改訂（1998・1999 年）により，系統主義に基づく知識の教授を維持しつつ経験主義的な学習を強化しようとする改革が図られた。また，調査や表現などの諸活動を取り入れやすい主題学習が高校の世界史に導入されてから約 50 年が過ぎ，日本史に導入されてからでも約 40 年が過ぎた。しかも，第 7 次改訂によって主題学習は問題解決的な学習論として位置づけなおされた[2)]。そのような学習指導要領の改訂に伴って中学校や高校の歴史授業でも学習の主体化が図られ

るようになってきているはずであるという疑義や反論である。

第3は，仮に中学校や高校の歴史授業において教師によって一方的に伝達される歴史的知識の受容学習が大勢になっているとしても，それは問題ではないというものである。中学生・高校生自身は高校受験や大学受験のために多くの知識を効率よく教授してくれる歴史授業を求めているのではないか，そのような学習者の要求に応えることは教師として当然のことではないのかという疑義や反論である。

本稿では，これらの疑義や反論の妥当性を吟味し，歴史授業改善に向けて取り組むべき問題状況を明らかにするために，小・中・高の歴史授業の現状の把握を学習者の立場から明らかにしたい。

その方法として，小・中・高で受けてきた歴史授業に関する現役大学生へのアンケート調査を採り[3]，その調査結果を，藤井千之助が行った調査結果と比較する[4]。藤井は，1974～1977年の各年，小・中・高での歴史授業に関するアンケート調査を広島大学の学生を対象に行った。その調査結果は，1960年代から1970年代にかけての歴史授業の状況を明らかにしてくれている。知識偏重が著しかったといわれる当時からの変化の有無や動向と合わせてとらえることを目的に，藤井の調査問題を一部修正の上利用し，群馬大学・山梨大学の学生に対してアンケート調査を行った。調査は2009年秋から2010年夏にかけて無記名式で授業時を中心に行い，調査問題には小・中・高の歴史授業の全体を振り返っての感想を尋ねる質問項目も新たに加えた。回答者は群馬大学・山梨大学の学生299名（群馬大学学生196名，山梨大学学生103名）であり[5]，経験主義的な学習の強化が図られた第6次改訂・第7次改訂学習指導要領の施行下において小・中・高で歴史授業を受けた世代である。

本稿では以下，小・中・高の歴史授業のそれぞれについて順次，調査問題を示し，今回の調査結果を検討し，1970年代の藤井の調査結果と比較する。また，小・中・高の歴史授業に対する大学生の感想を検討する。それらを通して小・中・高の歴史授業における学習方法の現状と傾向を把握したい。

II．小学校歴史授業に関する調査結果と考察

1．質問項目

小学校での歴史授業に関する質問項目は，表1の通りである。

表1　小学校の歴史授業に関する質問項目

①あなたが小学校の社会科で経験した歴史授業について，下記の各項目で該当するものに○印をつけてください。
　ア．一斉での学習
　イ．グループでの学習
　ウ．個別学習（個人での学習）
　エ．教師の説明中心
　オ．教科書中心
　カ．話し合い中心
　キ．劇化の学習をおりこむ
　ク．視聴覚器材やパソコンの利用
　ケ．テーマ（主題）中心の学習
　コ．見学・調査
　サ．その他
②小学校の社会科で経験した歴史授業のなかで特に印象に残っていることを書いてください。

質問①は，経験した学習形態と学習方法を問うており，複数回答可である。そのうちのア～ウは主として学習形態に関するもの，エ～コは主として学習活動に関するものである。なお，藤井の調査問題では，クは「視聴覚器材の利用」となっており，ケは「課題」となっているが，今回の調査問題では，クは「視聴覚器材やパソコンの利用」とし，ケは「テーマ（主題）中心の学習」とした。

質問②は，自由記述式である。②の回答結果は，①の回答結果を検討するうえで参考にしたい。

2．調査結果

この質問項目には回答者全員の299名が回答した。但し，そのうちの1名は全く記憶がないとして実際には無記入であった。①の回答の集計結果は表2の通りであり，②の主な回答記述は表3の通りである。

表 2　小学校の歴史授業に関する質問①の回答

	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ	サ
299 名回答	248 名	111 名	49 名	172 名	195 名	10 名	5 名	42 名	21 名	85 名	5 名
	82.9%	37.1%	16.4%	57.5%	65.2%	3.3%	1.7%	14.0%	7.0%	28.4%	1.7%

※サ「その他」の 5 名の内訳：カルタ 2 名，歴史新聞づくり 1 名，調べ学習 1 名，歴史替え歌 1 名

表 3　小学校の歴史授業に関する質問②の主な回答

- 特にない。
- 印象に残っていない。
- 教科書の内容を板書していた。
- 教科書中心で順番に読ませていく方式。
- 教科書を中心とした授業で特に印象に残っていることはない。
- ワークシート式でやったものを冊子にしていった。
- 教科書中心で歴史アニメをたまに観たことが印象に残っている。
- 年号の覚え方（語呂合わせが楽しくてすすんで覚えた）。
- 見学。
- 地域の史跡を見学しに行った。
- 博物館に行った。
- 人物についてパソコンで調べた。
- 人物に注目しての調べ学習。
- 人物の話。
- 物語風に工夫して説明してくれた。
- 人物について調べて新聞を作成した。
- 人物シールの活用。
- 刀狩について自分で台本をつくって演劇をした。
- 修学旅行に向けて調べた。
- 図書館での調べ学習（あまり楽しくなかった）。
- ディスカッション。
- 縄文時代と弥生時代の絵をくらべて相違点をさがした。
- 戦争の話。
- 戦争の体験者へのインタビュー。
- ビデオを観た。
- テレビを使った学習。
- 替え歌で覚えた。
- 徳川家の将軍の名前を全部覚えた。
- 毎時間のようにテストがあった。
- 仏像などの美しさ。　など

①についての集計を見ると，学習形態においては，全回答者のなかでア「一斉での学習」を回答している割合が 8 割を超えている。イ「グループでの学習」の回答割合は 3 割を超えている。ウ「個別学習（個人での学習）」の回答割合は 1 割台である。

学習活動においては，オ「教科書中心」とエ「教師の説明中心」の回答割合が 5 割以上である。それ以外では，コ「見学・調査」の回答割合が 3 割近くと比較的高いが，ク「視聴覚器材やパソコンの利用」が 1 割台，他は 1 割未満である。

②の回答では，「教科書を中心とした授業で特に印象に残っていることはない」，「教科書中心で順番に読ませていく方式」などといった回答も見られるが，見学，歴史新聞づくり，調べ学習，ビデオ視聴，劇化などの学習活動を挙げる回答も見られる。グループあるいは個人での活動的な学習が印象に残っているようである。もっとも，多くの回答者は「特にない」と答えている。

小学校の歴史授業では，グループ学習や見学・調査学習も一定程度は行われている。とはいえ，小学校の歴史授業であっても，教科書中心・説明中心の一斉学習という印象が大学生に残っており，その学習方法は実際多くとられていると考えられる。

3．新旧の調査結果の比較考察

先述したように，藤井は 1974～1977 年の各年において広島大学の学生を対象に調査を行っている。それらの結果と今回の結果を表に整理したものが表 4 である。

1970 年代の調査でも，今回の調査でも，学習形態のア「一斉での学習」の回答割合が 8 割以上と依然として高い。しかしながら，イ「グループでの学習」の回答割合がかつては 2 割程度であったが，今回の調査ではそれよりも高い 3 割台後半となっている。ウ「個別学習」の回答割合も低いレベルではあるが伸びている。

表 4　小学校の歴史授業に関する新旧の調査結果

		ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ	サ
藤井の調査（広大）	1974 年（236 名）	86%	18%	1%	60%	63%	1%	0%	19%	5%	8%	0%
	1975 年（235 名）	89%	27%	2%	50%	61%	6%	0%	10%	7%	11%	1%
	1976 年（236 名）	81%	22%	2%	50%	55%	6%	1%	25%	13%	8%	2%
	1977 年（236 名）	81%	23%	4%	55%	53%	6%	2%	24%	14%	16%	1%
今回の調査（群大・梨大）	2009・2010 年（299 名）	82.9%	37.1%	16.4%	57.5%	65.2%	3.3%	1.7%	14.0%	7.0%	28.4%	1.7%

（藤井の調査の結果は，藤井（1985）p.17 より）

学習活動においては，エ「教師の説明中心」とオ「教科書中心」の回答割合が 5〜6 割程度であり，依然として高い。ただ，コ「見学・調査」の回答割合は 1 割前後から 3 割近くへ上昇している。一方，視聴覚器材などの利用に関するクの回答割合は若干ではあるが下がっている。

1970 年代の調査結果とくらべて，全体として著しく変わっているといえるほどではない。小学校の歴史授業では教科書中心・説明中心の一斉での学習が依然として中心である。ただ，近年，グループ学習などの他の学習形態や見学・調査という他の学習活動が以前よりはとられるようになっていることが窺われる。

Ⅲ．中学校歴史授業に関する調査結果と考察

1．質問項目

中学校での歴史授業に関する質問項目は，表 5 の通りである。

質問①の選択肢ア〜ケは複数回答可である。ア〜ウは主として学習形態に関するものであり，エ〜クは主として学習活動に関するものである。

なお，藤井の調査問題では，カは「課題」となっているが，今回の調査では，カは「テーマ（主題）中心の学習」とした。

質問②は，自由記述である。②の回答結果は，質問①の回答結果を検討するうえで参考にしたい。

表 5　中学校の歴史授業に関する質問項目

①あなたが中学校の社会科で経験した歴史授業について，下記の各項目で該当するものに○印をつけてください。
　ア．一斉での学習
　イ．グループでの学習
　ウ．個別学習（個人での学習）
　エ．教師の説明中心
　オ．話し合い中心
　カ．テーマ（主題）中心の学習
　キ．見学・調査
　ク．人物中心の学習
　ケ．その他
②中学校の社会科で経験した歴史授業のなかで特に印象に残っていることを書いてください。

2．調査結果

この質問項目には回答者全員の 299 名が回答した。①の回答の集計結果は表 6 の通りであり，②の主な回答記述は表 7 の通りである。

表 6　中学校の歴史授業に関する質問①の回答

	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ
299 名回答	234 名	64 名	30 名	286 名	9 名	12 名	23 名	12 名	5 名
	78.3%	21.4%	10.0%	95.7%	3.0%	4.0%	7.7%	4.0%	1.7%

※　ケの 5 名の内訳：記述なし 1 名，プリントを使った授業 1 名，体験 2 名，歴史自作ノートづくり 1 名

表 7　中学校の歴史授業に関する質問②の主な回答

- 特にない。
- 特に印象に残っていない。
- 説明中心であまり印象が残っていない。
- 記憶に残るような面白い授業はなかった。
- 教科書中心・板書多量・暗記型の授業。
- 板書を全員が写してから説明するという授業スタイル。
- 黒板中心の授業。
- ひたすら暗記をした。
- 説明を聞きプリントに書き込む授業。
- 書く量が多かった。
- プリントの空欄をうめる授業。
- 先生が自分のノートをコピーし配布して授業。
- 先生のノートが中心。
- 語呂合わせ。
- 木簡をつくった。
- 勾玉・土器づくり。
- 見学。
- 実物を見せてくれた。
- マンガ。
- 映画を観た。
- ビデオ。
- 人物の顔写真シール。
- 1 つのテーマをあげて各自まとめた内容を提出。
- グループごとにテーマを与えられて調べ発表。
- 戦争の名称のつくられ方。
- 勘合符を先生がつくってきて説明。
- 小テスト。
- 板書が見やすかった。
- エピソードに興味がもてた。
- 教師の歴史オタク的な話が多かった。
- 豆知識。
- 修学旅行の事前学習。　など

①についての回答では，学習形態において，ア「一斉での学習」の回答割合が 8 割近くと高い。イ「グループでの学習」は 2 割程度，ウ「個別学習」は 1 割程度の回答割合にすぎず，前出の小学校の場合よりも低い。

学習活動においては，エ「教師の説明中心」の回答割合が 9 割を超え，きわめて高い。小学校の場合と比べても非常に高い。それ以外の回答の割合はいずれも 1 割未満である。

中学校での歴史授業のなかで特に印象に残っていることを自由記述式で尋ねた②への回答では，無記入あるいは「特にない」というものが多かった。その他では，教師が作成した穴埋式のプリントの利用について挙げる回答が散見された。また，「書く量が多かった」，「教科書中心・板書多量・暗記型の授業」などが印象に残っているという回答が少なくなかった。

一方，「エピソードに興味がもてた」，「豆知識」など，教師の説明に興味がもてたという印象を挙げる回答があった。「勾玉・土器づくり」，「木簡をつくった」などの活動について挙げる回答もあった。教師は説明中心の授業のなかで何とか学習者が興味・関心をもてるような工夫に努めていることが窺われる。しかし，例えば木簡というように，特定の 1 つのものに限定して挙げられていることから，そのような活動が頻繁になされていたわけではないことが推察される。①においてエ「教師の説明中心」以外の学習活動の回答がいずれも 1 割未満であることから，そのように捉えられよう。

中学校の歴史授業では，教師の説明に基づく一斉学習が中心となっており，その枠内において学習者が興味・関心をもてるようにする工夫が行われていると考えられる。

3．新旧の調査結果の比較考察

藤井による各年の調査結果と今回の調査結果を表にしたものが表 8 である。

中学校での歴史授業の場合，学習形態では，ア「一斉での学習」が 7 割台で大きく変化しておらず，依然として中心的位置にある。イ「グループでの学習」の回答割合はかつても今も 2 割前後であり，減じてはいないが増してもいない。ウ「個別学習」の回答割合が比較的伸びているとはいえ，それでも 1 割程度になったにすぎない。

学習活動では，エ「教師の説明中心」が依然として中心的位置にあり，その回答割合は 6 割台から 9 割台後半へと急激に高まっている。この点は注目すべきことである。授業時数が削減されるなか，限られた時間において一定の歴史的知識を伝授すること

表 8　中学校の歴史授業に関する新旧の調査結果

		ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ
藤井の調査（広大）	1974 年（236 名）	79%	16%	1%	68%	6%	5%	2%	1%	0%
	1975 年（236 名）	78%	22%	3%	63%	4%	6%	2%	1%	0%
	1976 年（236 名）	73%	20%	0%	65%	5%	18%	4%	2%	2%
	1977 年（236 名）	71%	23%	2%	64%	5%	17%	5%	0%	4%
今回の調査（群大・梨大）	2009・2010 年（299 名）	78.3%	21.4%	10.0%	95.7%	3.0%	4.0%	7.7%	4.0%	1.7%

（藤井の調査の結果は，藤井（1985）pp.17-18 より］

が最優先されているのではなかろうか。

中学校歴史授業における学習方法は，説明中心の一斉での学習が依然として中心であり，特に説明中心という傾向は近年強まっていると捉えられる。

Ⅳ．高校世界史授業に関する調査結果と考察

高校での歴史授業に関しては，世界史の場合と日本史の場合とに分けて検討することにしたい。まず，世界史の場合から検討する。

1．質問項目

世界史授業に関する質問項目は，表 9 の通りである。世界史 A と B の質問項目の違いは，質問①②での科目名が A か B かの違いのみである。

質問①の選択肢ア～クの 8 個は複数回答可であり，ア～ウは主として学習形態に関するもの，エ～キは主として学習活動に関するものである。

藤井の調査問題では，カは「主題学習」となっており，キは「視聴覚器材の利用」となっているが，今回の調査では，カは「テーマ（主題）中心の学習」とし，キは，「視聴覚器材やパソコンの利用」としている。

質問②は，自由記述式で問うたものである。

表 9　世界史 A（または B）の授業に関する質問項目

①あなたが高校で経験した世界史 A（または B）の授業について，下記の各項目で該当するものに○印をつけてください。
　ア．一斉での学習
　イ．グループでの学習
　ウ．個別学習（個人での学習）
　エ．教師の説明中心
　オ．話し合い（発表学習）
　カ．テーマ（主題）中心の学習
　キ．視聴覚器材やパソコンの利用
　ク．その他
②高校の世界史 A（または B）の授業のなかで特に印象に残っていることを書いてください。

2．調査結果

(1)　世界史 A

世界史 A の①についての集計結果は表 10 の通りであり，②についての主な回答記述は表 11 の通りである。

表10　世界史 A の授業に関する質問①の回答

	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク
116 名回答	85 名	1 名	3 名	108 名	2 名	3 名	5 名	1 名
	73.3%	0.9%	2.6%	93.1%	1.7%	2.6%	4.3%	0.9%

※クの 1 名：具体的記載なし

表11　世界史 A の授業に関する質問②の主な回答

- 特にない。
- 特に印象に残っていない。
- 残念ながら全く何も残っていない。
- ひたすら板書を写していた。たまにある脱線話を楽しみにしていた。
- 黒板の授業。
- 先生がばっと板書をして説明。
- ずっと教科書の太文字を学習した。
- プリントが沢山だった。
- 穴埋式。
- プリントを使用しての授業。
- プリントで要点をまとめる。
- 先生の配るプリントに答えを書くだけの授業に驚いた。
- 発言する機会がなかった。
- 眠かった。
- 人物のエピソード。
- こぼれ話。
- 雑談。
- 自分で興味のある国を調べ発表した。
- ビデオ。
- 映画の話。
- 詳しく学んだ。
- 板書がきれいでわかりやすかった。　など

質問項目への回答者は，世界史 A を履修した 116 名である。

①について見てみると，学習形態において，ア「一斉での学習」の回答割合が 7 割を超えている。イ「グループでの学習」やウ「個別学習」の回答割合は皆無に近いことから，一斉での学習が中心であると考えられる。

学習活動においては，エ「教師の説明中心」の回答割合が 9 割を超えており，非常に高い。それ以外についてはいずれも非常に低い。

②においては，穴埋式のプリントの使用について挙げている回答，板書の多さについて挙げている回答が目立つ。エピソードの紹介について述べている記述もあった。また，学習の内容に関する肯定的な評価も少数ながら見られた。

世界史 A の授業では，ほとんどの場合，説明に基づく一斉学習が行われている。その際，穴埋式のプリントが使用されることも少なくないようである。

⑵　世界史 B

世界史 B の①についての集計結果は表 12 の通り，②についての主な回答記述は表 13 の通りである。

表13　世界史 B の授業に関する質問②の主な回答

- 特にない。
- 特に印象に残っていない。
- 教科書中心の授業。
- 板書が多かった。
- 板書が多くずっとノートをとっていた。
- 穴埋式のプリント。
- 1 問 1 答式のプリント。
- はやい進度。
- 暗記中心。
- センター試験対策ばかりしていた。
- 入試の記述式問題の対策。
- 小テスト。
- 特別なことはしなかった。
- おもしろいエピソード。
- 歴史用語のカルタ。
- 映画。
- 2ヶ月に 1 回の調べ学習。
- つまらなかった。
- とてもわかりやすく世界史が大好きになった。
- 歴史と今の生活とのつながり。　など

質問項目への回答者数は，世界史 B を履修した 187 名である。世界史 A の調査との両方に回答している者もいる。

表12　世界史 B の授業に関する質問①の回答

	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク
187 名回答	139 名	5 名	9 名	183 名	1 名	1 名	9 名	1 名
	74.3%	2.7%	4.8%	97.9%	0.5%	0.5%	4.8%	0.5%

※クの 1 名：具体的記載なし

①では，学習形態において，ア「一斉での学習」の回答割合が7割を超えている。世界史Aの場合と同程度である。やはり，イ「グループでの学習」やウ「個別学習」の回答割合はきわめて低い。

学習活動においては，エ「教師の説明中心」の回答割合が9割後半と非常に高い。同じ9割台であるが，世界史Aの場合よりも高い。それ以外については非常に低い。

②においては，世界史Aの場合よりも無記入の回答が多く，「特に印象に残っていない」という回答もあった。その他では，受験対策について述べている回答，板書の多さについて述べている回答，穴埋式のプリントの使用について述べている回答が多かった。エピソードの紹介について述べている記述もあった。調べ学習や歴史用語カルタなどの活動について挙げている回答も僅かながらあった。また，学習の内容に関する肯定的な評価も少数であるが見られた。

世界史Bの授業では，世界史Aの場合と同様，説明に基づく一斉学習が中心的に行われており，その際に穴埋式の配布プリントが使用されることも少なくないようである。

なお，世界史Aと世界史Bのいずれの調査項目でも，①においてカ「テーマ（主題）中心の学習」を選択している回答はほとんどなかった。主題学習は世界史の授業において，少なくとも学習者が意識できるようなかたちではほとんどなされていないと捉えざるをえないであろう。

3．新旧の調査結果の比較考察

①の結果における世界史Aと世界史Bの全体での平均値を算出し，藤井による1974〜1977年の各年の調査結果とあわせて表にまとめたものが表14である。

高校の世界史授業の場合，学習形態では，ア「一斉での学習」の回答割合は僅かながら減じているが7割台と依然高い水準のままである。イ「グループでの学習」やウ「個別学習」の回答割合はあいかわらず低い。

学習活動では，エ「教師の説明中心」の回答割合はかつても7割台と高かったが，さらに9割台へと大きく上昇している。その他の活動はほとんどなされていないようである。カ「テーマ中心の学習」の回答割合は元々低かったが，依然として低いままである。主題学習は学習者が意識できるかたちでは今なおほとんど行われていないのではなかろうか[6]。

一斉学習中心が続いており，教師の説明中心の傾向が一層強まっている。世界史Aと世界史Bの②の回答において穴埋式のプリントの使用に関する記述が目立ったこと，世界史Bの②の回答において受験対策的な学習に関する記述が目立ったことから，一定の知識を限られた授業時間内で効率よく教授しようという教師の意識が以前よりも高まっているのではないかと考えられる。

表14　世界史の授業に関する新旧の調査結果

		ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク
藤井の調査（広大）	1974年（236名）	84%	1%	1%	71%	6%	1%	—	—
	1975年（236名）	82%	6%	0%	75%	4%	4%	4%	2%
	1976年（235名）	77%	0%	1%	76%	3%	0%	14%	2%
	1977年（234名）	78%	3%	2%	73%	3%	4%	7%	3%
今回の調査（群大・梨大）	2009・2010年（のべ303名）	73.9%	2.0%	4.0%	96.0%	1.0%	1.3%	4.6%	0.7%

（藤井の調査の結果は，藤井（1985）pp.20-21より）

Ⅴ．高校日本史授業の調査結果と考察

1．質問項目

質問項目は，表 15 の通りである。日本史 A と日本史 B の質問項目の違いは，質問①②での科目名が A か B かの違いのみである。

質問①の選択肢ア～コの 10 個は複数回答可である。ア～ウは主として学習形態に関するものであり，エ～ケは主として学習活動に関するものである。

なお，藤井の調査ではカは「課題」となっており，キは「視聴覚器材の利用」となっているが，今回の調査ではカは「テーマ（主題）中心の学習」とし，キは「視聴覚器材やパソコンの利用」としている。

質問②は，印象に残っていることを自由記述式で問うたものである。

表15　日本史 A（または B）の授業に関する質問項目

①あなたが高校で経験した日本史 A（または B）の授業について，下記の各項目で該当するものに○印をつけてください。
　ア．一斉での学習
　イ．グループでの学習
　ウ．個別学習（個人での学習）
　エ．教師の説明中心
　オ．話し合い（発表学習）
　カ．テーマ（主題）中心の学習
　キ．視聴覚器材やパソコンの利用
　ク．見学・調査
　ケ．人物中心の学習
　コ．その他
②高校の日本史 A（または B）の授業のなかで特に印象に残っていることを書いてください。

2．調査結果

⑴　日本史 A

質問①の回答の集計結果を表 16 に示し，質問②の主な回答記述を表 17 に示した。

表17　日本史 A の授業に関する質問②の主な回答

- 特になし。
- 特に印象に残っていない。
- プリント中心。
- プリントばっかり。
- プリントの穴埋め。
- 予習でプリントに穴埋めをし授業で答えあわせ。
- 覚えることが沢山あり，板書も見づらく，わかりにくかった。
- 細かい歴史の知識。
- 先生の話。
- エピソード。　など

質問項目への回答者は，日本史 A を履修した 49 名である。

質問①における学習形態については，ア「一斉での学習」の回答割合が約 9 割と非常に高い。逆に，イ「グループでの学習」やウ「個別学習」の回答割合は非常に低い。

学習活動については，エ「教師の説明中心」の回答割合が 9 割を超えており，それ以外の割合は非常に低い。教師の説明による一斉学習が中心的に行われているようである。

質問②に対して記述している回答は多くはなかった。記述のある回答では，穴埋め式のプリントに関するものが多かった。

日本史 A の授業では，穴埋め式のプリントや板書などに基づく教師の説明中心の一斉学習が圧倒的であると捉えられる。

⑵　日本史 B

質問①の回答の集計を表 18 に示し，質問②の主な回答記述を表 19 に示した。

質問項目への回答者は，日本史 B を履修した 144 名である。

表16　日本史 A の授業に関する質問①の回答

	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ
49 名回答	44 名	0 名	2 名	46 名	1 名	2 名	1 名	0 名	0 名	0 名
	89.8%	0%	4.1%	93.9%	2.0%	4.1%	2.0%	0%	0%	0%

表18　日本史 B の授業に関する質問①の回答

	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ
144 名回答	116 名	4 名	10 名	141 名	0 名	3 名	3 名	0 名	1 名	0 名
	80.6%	2.8%	6.9%	97.9%	0%	2.1%	2.1%	0%	0.7%	0%

表19　日本史 B の授業に関する質問②の主な回答

- 特になし。
- 特に印象に残っていない。
- プリントの穴埋め。
- プリントを先生が読んでいるだけの授業。
- 教科書＋プリント。
- ひたすら板書を写す授業。
- 板書が多かった。
- 黒板の授業。
- 先生が教科書の重要単語をペンでチェックさせるだけの授業。
- 毎回，小テスト。
- 受験対策。
- 暗記が全ての授業。
- レプリカを見せてくれた。
- 絵や図を使った授業。
- 劇仕立ての説明。
- エピソード。　など

①の学習形態に関しては，ア「一斉での学習」の回答割合が約 8 割と高い。イ「グループでの学習」やウ「個別学習」の割合は低い。

学習活動においては，エ「教師の説明中心」の回答割合が 9 割台後半となっている。同じ 9 割台であるが，日本史 A の場合よりも高い。それ以外のものは非常に低い。日本史 B でも，教師の説明による一斉学習がほとんどのようである。

②に対して記述している回答では，日本史 A の場合と同様，穴埋め式のプリントに関するものが目立ち，受験対策に関するものも多かった。

日本史 B の授業でも，穴埋め式のプリントなどを使用した教師の説明中心の一斉学習が圧倒的であると捉えられる。日本史 A でも，日本史 B でも，教師の説明による一斉学習が大勢となっていることがわかる。

なお，日本史 A，B のいずれの質問①においても，カ「テーマ（主題）中心の学習」を回答している者はほとんどなかった。世界史の場合と同様に日本史でも，主題学習は少なくとも学習者が意識できるようなかたちではほとんどなされていないと受けとめざるをえないであろう。

3．新旧の調査結果の比較考察

質問①の回答結果における日本史 A と B の全体での平均値を算出し，藤井による 1974～1977 年の各年の調査結果とあわせて表にまとめたものが表 20 である。

日本史授業では，学習形態において，ア「一斉で

表20　日本史の授業に関する新旧の調査結果

		ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ
藤井の調査（広大）	1974 年（236 名）	86%	2%	2%	80%	7%	3%	6%	1%	1%	3%
	1975 年（236 名）	86%	5%	1%	80%	6%	8%	6%	2%	1%	3%
	1976 年（235 名）	77%	3%	3%	77%	4%	8%	10%	1%	3%	5%
	1977 年（236 名）	81%	4%	2%	73%	4%	10%	7%	2%	0%	4%
今回の調査（群大・梨大）	2009・2010 年（193 名）	82.9%	2.1%	6.2%	96.9%	0.5%	2.6%	2.1%	0%	0.5%	0%

（藤井の調査の結果は，藤井（1985）pp.19-20 より）

の学習」の回答割合がほぼ8割台を維持している。イやウというその他の形態の割合は，ウが若干上昇しているとは言え，低いままである。

学習活動においては，エ「教師の説明中心」は以前も7〜8割と高かったが，一層高くなり，9割台後半となっている。また，その他の活動は従来よりほとんどなされていないようである。カ「テーマ中心の学習」の回答割合は元々低いが，さらに下がっており，主題学習が一層行われなくなってきていることが窺われる。

日本史の授業では依然として一斉学習が中心であり，教師の説明中心という傾向が強まっている。やはり，世界史の場合と同様，大学受験に向けて一定の知識を限られた授業時間数の中で効率よく教授しようという教師の意識が以前よりも高まっているのではなかろうか。

Ⅵ．小・中・高での歴史授業に対する感想の調査結果と考察

今回の調査では，小・中・高での歴史授業全体を振り返っての感想を尋ねる質問項目も設定した。その質問項目を示し，調査結果を検討したい。

1．質問項目

質問項目は，表21に示した通り，自由記述式で尋ねるものである。

表21　小・中・高での歴史授業の感想を尋ねる質問項目

小学校・中学校・高校での歴史授業を振り返って思うことや考えることを自由に述べてください。

2．調査結果

この質問項目への回答では，無記入の回答をはじめ，「特になし」，「あまり記憶に残っていない」，「特に印象に残っていない」といった回答など，実質的に感想を記していない回答が約4分の1を占めた。299名中の74名（24.7%）の回答がそれに該当する。それ以外の225名の回答を歴史授業について肯定的に評価づけているか否定的に評価づけているかで分けてみると[7]，肯定的に評価づけているものが40名（13.4%），否定的に評価づけているものが140名（46.8%），どちらでもないものが45名（15.1%）である。回答者全体299名の半数近く，感想を述べている回答者225名の約6割が否定的に評価づけている。肯定的評価・否定的評価の回答記述の代表的なものを示したものが表22である。

肯定的評価の回答は，多くの場合，教師の豊富な知識やわかりやすい説明にひきつけられたとか，歴史の裏話やエピソードが面白かった等である。討論やグループ活動，資料活用や映像視聴などを理由としてあげている回答も少数あるが，多くは歴史授業での教師による説明の内容やエピソードの紹介などから肯定的に評価づけているようである。

一方，全回答の過半数を占める否定的評価の回答のほとんどは，学習形態や学習活動を否定的に評価づけているものである。それらの回答も一様ではない。

校種を明示しない形での否定的評価の回答が76名，小・中・高という校種を明示しての否定的評価の回答が6名，小・中という校種を明示しての否定的評価の回答が2名，中・高という校種を明示しての否定的評価の回答が19名，中学校という校種を明示しての否定的評価の回答が6名，高校という校種を明示しての否定的評価の回答が31名である。

校種を明示するかたちでの否定的評価の回答では，高校の歴史授業に対する否定的評価の回答，中・高の歴史授業に対する否定的評価の回答が多い。否定的評価の回答の半数以上は校種を明示しないかたちでのものであるが，記述の内容からは高校の歴史授業や中・高の歴史授業を念頭において述べているものが多いように見受けられる。

中・高の歴史授業に限定しての否定的評価の回答には，「中・高では恐ろしいほどの知識詰め込み」，「中学校・高校と上がっていくうちに，自分で調べるという授業が少なくなった」，「小・中・高と上がるにつれて受験対策中心の授業になり，討論や調べ学習のような授業が減っている」，「中・高では教科書の内容を学習するだけのものが多く，退屈だった」などがある。高校の歴史授業に限定しての否定的評

表22　小・中・高での歴史授業に対する肯定的評価・否定的評価の主な記述

◆肯定的評価の回答―40 名（13.4%）

・歴史授業は高校の世界史 B が一番楽しかった。世 B の先生は本当に世界史が大好きで知識が豊富なので，聞いていて理解しやすく面白かった。
・歴史の授業はあまり好きではなかったが，おもしろいエピソードがあると，興味をもって授業に取り組めた。
・高校の世界史の先生が知識がたくさんあり，とても興味を持って学習できた。
・時々，歴史の裏話や今まで当たり前に感じていたことが違っていることに気づかされた時は興味深かった。
・非常に歴史に興味をもてる授業が多かったように思える。
・すごく楽しかった。
・中学校のときはクラスで討論を行ったりグループで考える活動などが多く，飽きなかった。
・色々な資料や映像をつかったりした授業はとても印象にのこっています。　など

◆否定的評価の回答―140 名（46.8%）

○校種を明示しないかたちでの歴史授業に対する否定的評価の回答―76 名

・とにかく教科書だった。こんな調子で歴史をやって好きになれる人の方が珍しいかもしれない。
・先生の説明がメインの授業が多かったように思う。
・教科書の内容を暗記していく授業で，板書も多く，あまり楽しくなかった。
・すべて暗記中心の授業で，授業自体はほとんど覚えていない。自分は歴史が好きだったので，勝手に勉強していた。
・先生の板書と教科書の解説が中心だったので，先生の話し方が上手じゃないと，すごくつまらなかった。
・プリントと板書を中心とした授業が多かった。たまにビデオを観たような記憶があるが，あまり印象に残っていない。
・先生からの一方的な説明の授業が多かった。
・歴史の面白さが伝わってこない授業が多い。　など

○小学校・中学校・高校という校種を明示するかたちでの否定的評価の回答―6 名

・小・中・高と席に座り板書をうつして先生の説明ばかりだった。暗記する科目の印象が強く，楽しめるものではなかった。
・小・中・高とすべて暗記型の授業が多かった。　など

○中学校・高校という校種を明示するかたちでの否定的評価の回答―19 名

・中・高では恐ろしいほどの知識詰め込み。
・中学校・高校と上がっていくうちに，自分で調べるという授業が少なくなった。
・小・中・高と上がるにつれて受験対策中心の授業になり，討論や調べ学習のような授業が減っている。
・中・高では教科書の内容を学習するだけのものが多く，退屈だった。　など

○高校という校種を明示するかたちでの否定的評価の回答―31 名

・高校での歴史授業は本当につまらなかった。先生が一人でしゃべってプリントを穴うめするだけだった。
・高校の歴史は，予備校のような感じ。
・高校では受験で使わないものは消化試合みたいに先生もあまりやる気なく，教科書を読んで，テストに出しそうな所を板書するだけで，まったく楽しくなかった。
・高校の日本史の授業を受けてから，日本史があまり好きではなくなった。
・小中では自分で調べてまとめることを何度かやったが，高校ではまったくやらなかった。　など

○中学校という校種を明示するかたちでの否定的評価の回答―6 名

・小学校は見学の機会が多かったが，中学校は試験のために勉強するという感じだった。
・中学校は教えられるだけで自分から何かをするという機会がなかった。　など

○小学校・中学校という校種を明示するかたちでの否定的評価の回答―2 名

・小・中ではたださらっとという感じ。　など

価の回答には,「高校の歴史は，予備校のような感じ」,「高校での歴史授業は本当につまらなかった。先生が一人でしゃべってプリントを穴うめするだけだった」,「高校では受験で使わないものは消化試合みたいに先生もあまりやる気なく,教科書を読んで,テストに出しそうな所を板書するだけで，まったく楽しくなかった」,「小中では自分で調べてまとめることを何度かやったが，高校ではまったくやらなかった」などがある。また，小学校から高校までの歴史授業に対する一貫した否定的評価の回答として,「小・中・高と席に座り板書をうつして先生の説明ばかりだった」,「小・中・高とすべて暗記型の授業が多かった」などもある。これらはいずれも，一斉学習中心という学習形態や教師の説明中心という学習活動を否定的に捉えている。しかも，高校の歴史授業については一致して否定的に捉えている。高校の歴史授業において教師の一方的な説明中心の一斉学習が支配的であり，学習が主体的なものとならず，学習意欲をもつことが難しかったという評価をそれらは示している。

この質問項目への回答結果から読みとれることは，少なくとも高校の歴史授業については否定的に評価している者の方が肯定的に評価している者よりも圧倒的に多いこと，否定的評価の主要な理由は教師の一方的な説明中心の一斉学習にあることである。高校生の多くは受験のためだから仕方がないと自分に言いきかせて歴史授業に耐えているということであろう。学習者が受験のために説明中心の一斉学習を積極的に望んでいるとはいえず，受け容れているとしても学習方法の他の可能性をよく知らないために消極的に受け容れているにすぎないと考えられる。学習者は受験のことなどどうでもよいとはもちろん考えておらず，きわめて重視しているに違いないだろう。しかし，現状とは異なる有意味で主体的な歴史学習を求めていることも確かであろう。

Ⅶ．おわりに―歴史授業における学習方法の現状と傾向

小・中・高の歴史授業の現状と傾向について，これまでの調査結果の考察をもとに次の 3 点を確認することができるだろう。

第 1 は，現在，中学校や高校においてだけでなく小学校においても，歴史授業では教師の説明に基づく一斉学習が主要な学習方法となっていることである。

その度合いは小・中・高と進むにともなって高まり，高校の歴史授業において著しい。小学校の場合は中学校や高校の場合ほどではないことは確かなようである。小学校ではグループ学習などの他の学習形態や見学・調査といった他の学習活動が以前に比べればとられるようにもなっている。しかしながら，説明に基づく一斉学習が今もなお，主要な歴史学習方法となっている。小学校においてさえ，主体的な歴史学習が主流になっているとはいえないのが現状である。本稿の冒頭で挙げた第 1 の疑義や反論は成り立たないのである。

第 2 は，教師の説明に基づく一斉学習が中心であるという状況は，1960 年代から 1970 年代にかけての状況とくらべて大きくは変わっていないこと，そればかりか中学校や高校の場合にはそのような傾向が一層強まっていることである。

小学校の歴史授業では，他の学習形態や他の学習活動が以前に比べればとられるようになっているようである。しかし，中学校や高校の歴史授業では事態は悪化していると受けとめざるをえない。近年，学習指導要領の改訂によって経験主義的な学習の強化が図られたし，高校の世界史や日本史において主題学習が問題解決的な学習方法として位置づけなおされた。にもかかわらず，実際には中・高の歴史授業における学習方法は多くの場合に改善されず，説明に基づく一斉学習が中心という傾向はさらに強まっている。本稿の冒頭で挙げた第 2 の疑義や反論は成り立たないのである。さらに今後，2008・2009 年の今次の学習指導要領改訂がもしも単なる知識重視への逆戻りと受けとめられてしまうならば，事態はさらに深刻化していくのではないか。

第 3 は，学習者の多くは説明中心の一斉学習を積極的に求めているわけではないことである。大学受験を控えた高校の場合においてもそうである。

説明中心の一斉学習とは異なる歴史学習体験をほとんどもたず,他の可能性をよく知らない学習者は,それを受験のためと消極的に受け容れざるをえない。けれども，多くの学習者はそのような歴史学習に意欲をもつことができず，実際には主体的な歴史学習を求めている。説明中心の一斉学習という特に中学校や高校において顕著な歴史学習の在り様は，受験の存在によって縛られているともいえるが，受験の存在を理由にして再生産され続けており，受験の存在によって支えられているともいえる。そのような説明中心の一斉学習は歴史嫌いをうみだす大きな要因の 1 つとなっている。本稿の冒頭で挙げた第 3 の疑義や反論は成り立たないのである。

本稿の冒頭で取りあげた歴史授業批判に対する 3 つの疑義や反論は何れも妥当性をもつものとはいえないわけである。

教師による説明に終始する歴史授業には大きな問題がある。それは，学習者が学習意欲をもつことを困難にすること，学習者を歴史嫌いにしてしまうことだけではない。そのような歴史授業は，特定の解釈結果である，その解釈内容の筋道にそって個々の事項を順序づけて取りあげ，それらについての知識を提示していくことで解釈内容も受け容れさせていく。事実についての解釈を事実そのもののように教え，それが作られたものであることや他にも在りうることに気づかせない。それ故に，解釈の背後にある特定の視点や立場を無意図的・無自覚的かもしれないが鵜呑みにさせてしまいかねない。教師の説明に終始する歴史授業は教化という本質的な問題を孕んでいるのである。

調査の結果から明らかとなった歴史授業における学習方法の在り様は問題である。学習者は主体的な歴史学習を望んでいるにもかかわらず，小・中・高を問わず歴史授業において説明形式の学習が中心となっている。特に，中・高の歴史授業において依然として支配的となっており，その傾向は一層強まっている。

歴史授業の問題状況はきわめて深刻であり，その克服は今なお未解決の大きな課題であることが明らかとなった。

【註】

1）もう 1 つの代表的な批判として，歴史上のさまざまな出来事に関する個別的記述的知識の学習という内容面に対するものがある。学習者にとって有意味な学習が行われていないことが批判されている。歴史授業において主体的な学習が行われていないことと有意味な学習が行われていないことは度々批判されてきた。

2）世界史や日本史における主題学習については，原田智仁「主題学習」日本社会科教育学会『社会科教育事典』ぎょうせい，2000 年，pp.152-153。有田嘉伸「主題学習」森分孝治・片上宗二編『社会科重要用語 300 の基礎知識』明治図書，2000 年，p.219。また，松田至弘『世界史学習の研究』教育出版センター新社，1987 年，他，参照。

3）これは学習者の立場からみた歴史学習方法について，現状や傾向を捉えようとするものである。歴史学習を指導している教師への調査をこそ実施すべきではないのかという疑問が示されるかもしれない。教師への調査ももちろん重要であるが，今回は歴史学習を指導される学習者自身は歴史学習を実際にどのように受けとめているのかという観点から現状・傾向の把握に取り組みたい。但し，学習者は全ての歴史授業を記憶しているわけではなく，印象に残っていることに基づいて回答するわけであろうから，その点には留意しなければならないであろう。

なお，高校の世界史教師に対するアンケート調査に基づく実態把握として，岩永健司「世界史「主題学習」の実施状況に関する一考察―群馬県内の公立高校教員へのアンケート調査結果から」『群馬大学教育実践研究』第 24 号，2007 年，がある。

4）藤井千之助『歴史意識の理論的・実証的研究』風間書房，1985 年，pp.13-32。

5）群馬大学でのアンケート調査の実施は岩永が担当した（回答者は教育学部学生）。山梨大学でのアンケート調査の実施は服部が担当した（回答者は教育人間科学部学生・工学部学生）。

今回調査を行った群馬大学・山梨大学の学生，及び 1970 年代に藤井が調査を行った広島大学の学生に関しては，出身高校の学科・課程において偏りがあり，高校での歴史学習に関する調査結果が多種多様なタイプの高校における状況をつかむうえでは限界をもつものであることは否定できないだろう。けれども，しばしば批判される普通科高校での歴史授業における学習方法の現状や傾向を把握するうえでは有効なものであると考える。

6）岩永による群馬県内の公立高校教員へのアンケート調査（2006 年実施）によれば，世界史における主題学習の実施率は群馬県内の公立高校の場合で 30%強である。30%強という自覚的に実施したことのある教師の比率そのものが高い比率とはいえないが，高校生のときに経験したことがあ

るという大学生回答者の比率はさらに格段に低い。世界史において主題学習は学習者が意識できるかたちではほとんど行われていないのではなかろうか。岩永前掲論文を参照。

7）一部の校種での歴史授業のみに対する肯定的評価が述べられているものでも，他の校種での歴史授業に対する否定的評価が述べられていない回答は，肯定的評価の回答とみなしている。また，一部の校種での歴史授業に対する肯定的評価が述べられていても，他の校種での歴史授業に対する否定的評価が述べられている回答は，否定的評価の回答とみなしている。それらの回答記述を見渡してみると，実質的には中・高の歴史授業を肯定的に評価づけるか否定的に評価づけるかの違いが大きい。